



自ら跳び箱運動の楽しさを味わう学習指導の工夫

－基礎感覚づくり運動と系統性のある学習を通して－

南城市立大里南小学校教諭 城田 聡

1 研究のテーマについて

子ども達は、野原に転がったり逆さになって眺めたりすることに好奇心を示す。非日常的な活動に未知の不安や楽しさを感じ取る。跳び箱運動には、技や動きを獲得したとき、他の体育の単元では味わうことができない達成感や満足感を得ることができる。「跳び箱の授業って楽しいね！」子ども達からそんな声が聞きたくてこの研究をスタートした。

2 研究の特徴

基礎感覚づくり運動

低学年で非日常的な運動遊びが十分に行われている子は、跳び箱運動の技や動きを習得しやすい子が多い。転がったり逆さになる感覚（調整力や巧緻力等）を体験することは跳び箱運動の技や動きの習得に大いに効果的である。跳び箱運動のできる楽しさを味わわせるためにも基礎感覚づくり運動を取り入れた。

系統性のある学習

技や動きができるためには、技や動きについて分からなければできるようにならない。分かるためには技や動きについて学ばなければならない。「学び」から「分かる」になり「できるような気がする」から「できる」になる系統性のある学習をするために、学習資料や学習カード、場づくりの工夫をした。

3 指導の実際



障害物越えウサギ跳び



系統性のある場での練習

4 研究の成果

今回の跳び箱運動の授業を終えて、「跳び箱が好きになった」「六年生になってもやってみよう」という子ども達からの声が出てきたことが一番の成果だと思う。跳び箱を得意としていなかった子ども達が、練習に取り組み、できなかった技や動きができるようになった時の笑顔は、私自身忘れることはないだろう。一人ひとりの児童が跳び箱運動で味わった楽しさが今後の体育に活かされるためにも、今後も体育学習指導の工夫に励んでいきたい。

自ら跳び箱運動の楽しさを味わう学習指導の工夫 — 系統性のある学習と基礎感覚づくり運動を通して —

南城市立大里南小学校教諭 城田 聡

I テーマ設定の理由

跳び箱運動の
必要性

近年、体を使った野外遊び機会の減少による児童の体力の低下や、週2時間余りの体育の時間でしか運動に親しまない子の増加など、運動する子としない子の運動機会の二極化現象が起こっている。小学校学習指導要領体育科では、その目標の一部である「適切な運動の経験」において、児童の心身の発達の特性に合った運動を実践することによって、運動の楽しさや喜びを味わわせ、運動に対する親しみを育てることを目指している。遊びや運動の中には、児童期に発達する様々な運動要素が含まれている。特に跳び箱運動は、児童期に著しく発達する調整力や巧緻力などの運動要素を身に付けることができ、技や動きができたときの克服感や達成感を味わうことができる運動である。よって、自ら跳び箱運動の楽しさを味わわせることが、自ら運動に親しむ児童の育成につながると思われる。

跳び箱運動の
これまでの課題

跳び箱運動は、器械・器具を使った技や動きに取り組みながら、それを達成・克服したときに楽しさや喜びを目一杯味わうことができる運動であり、できる・できないがはっきり見える運動でもある。これまでの跳び箱運動の授業では、跳び箱を越える怖さがあるために、跳び箱の前で止まってしまう子や、跳び越えることができず、跳び箱の上にまたがったままの子などがいた。このような精神的・技術的に跳び箱ができない子に対して、個に応じた基礎的な運動を指導することができず、跳び箱嫌いな子をつくってしまうことがあった。跳び箱が得意な子に対しては、新しい技や動きを習得するための手だてが十分ではなかったため、単調な練習の繰り返しだけになり、学習意欲を低下させてしまうこともあった。また、児童が個々の能力に適した技や動きに取り組み、その技や動きができるようになるための、課題解決の仕方を学ばせることも十分ではなかった。このようにこれまででは、跳び箱運動の跳べる楽しさを味わわせる授業実践ができなかった。

跳び箱運動の楽しさを
味わわせるために

そこで、本研究では、自ら跳び箱運動の楽しさを味わわせるために、系統性のある学習資料や学習カードを活用しながら学び方を習得させ、基礎感覚づくり運動や系統性のある場を活用しながら、技能を習得するための学習指導を工夫したい。学び方を習得させるために、児童が跳び箱の技や動きの仕組みを理解し、自己の課題解決ができるために必要な方法を見つけ、段階的に練習ができるための系統性のある学習資料を作成する。また、「今できる技」「これからやってみたい技」の練習のポイントが確認できる系統性のある学習カードも作成する。これらの活用により、跳び箱運動の技や動きができる方法を見つけることができると考える。さらに、技能を習得させるために、跳び箱遊びの要素を含んだ基礎感覚づくり運動を毎時間取り入れて、跳び箱運動の素地づくりをする。系統性のある場づくりを行い、児童が個々の課題解決に適した練習の場を選び、段階的に技や動きが習得できるようにしたい。

よって、本研究では系統性のある学習と基礎感覚づくり運動を進めていくことで、自ら跳び箱運動の楽しさを味わう児童を育てることができると考えて、本テーマを設定した。

II 研究仮説と検証計画

1 研究仮説

体育学習において、次のような見通しを持って指導すれば、児童は、自ら跳び箱運動の楽しさを味わうことができるであろう。

- (1) 系統性のある学習資料や学習カードを活用すれば、技や動きができる方法を見つけることができるだろう。
- (2) 基礎感覚づくり運動や系統性のある場を活用すれば、今までできなかった技や動きができるようになるだろう。

2 検証計画

対象児童		：小学校5年生 36人	
教科名・単元名		：体育『跳び箱運動』	
	検証の場面	検証の視点	検証方法
見通し1	系統性のある、学習資料や学習カードを活用する場面	系統性のある学習資料や学習カードを活用させることは、児童が技や動きができる方法を見つけることができる上で有効であるか。	・跳び箱運動に関する自己評価表 ・形成的授業評価 ・学習カード ・行動観察
見通し2	基礎感覚づくり運動や系統性のある場を活用する場面	基礎感覚づくり運動や系統性のある場を活用させることは、児童が今までできなかった技や動きができるようになる上で有効であるか。	・跳び箱運動に関する自己評価表 ・形成的授業評価 ・学習カード ・行動観察
結果	活用全場面を通して	系統性のある学習と基礎感覚づくり運動を活用させることは、児童が自ら跳び箱運動の楽しさを味わうことができる上で有効であるか。	・跳び箱運動に関する自己評価表 ・形成的授業評価 ・学習カード ・行動観察

III 研究内容

1 自ら跳び箱運動の楽しさを味わうとは

(1) 跳び箱運動の特徴

体育の授業において、球技やレクリエーション的スポーツが盛んに行われている中、器械運動の領域である跳び箱運動は、できる・できないが自他共に見えるため、児童にあまり好まれない単元の一つである。しかし、生涯スポーツとしての観点を重視する体育学習では、児童の心身の発達の特性に合った運動を実践することにより、運動の楽しさや喜びを味わわせ、運動に対する親しみを育てることを目指している。そのような中、児童期に行う跳び箱運動には、跳び箱運動でなければ獲得しにくい運動があり、次のような特徴がある。

- ① 児童期に最も発達する平衡性、柔軟性、巧緻性など、さまざまな運動要素が含まれており、身体操作に必要な基礎感覚を身に付けることができる。
- ② 技や動きの習得に重きを置いた非日常性と驚異性、さらに簡潔性がある。
- ③ できる・できないがはっきりしている運動であり、より困難な条件の下でできるようになったときの克服感や、より雄大で美しい動きができるようになったときの達成感が味わえる。また、跳び箱を跳び越える楽しさや、空間に浮き上がった体をうまくコントロールして跳び越えるおもしろさがある。

(2) 自ら跳び箱運動の楽しさを味わうとは

児童にとって、跳び箱運動の楽しさとは、跳び箱が跳べることであり、技や動きがで

きるようになることである。ところが、跳び箱運動はできる・できないがはっきりしているため、挫折感を味わったり、苦手意識を持ってしまうことが少なくない。その反面、技ができたときの喜びは、他の体育の単元では味わえないほどの達成感がある。

跳び箱運動の技や動きは、非日常的な動きのため簡単には習得できないことが多いが、練習を繰り返して、できなかった技や動きができるようになったときの喜びは大きく、それが楽しさにつながっていくと考える。さらに、自分の思うように技ができたときや、軽やかに動きができたときに感じる達成感や動きの心地よさを感じることが跳び箱運動の楽しさを味わうことである。

(3) 跳び箱運動の楽しさを味わわせる工夫

跳び箱運動の技や動きができるようになるには、技や動きについて分からなければならない。技能を習得するだけでなく、どのような方法で練習すれば技や動きができるようになるのか、学ぶ学習も必要である。また、金子明友(1988)は「わかるような気がする段階」から「できるような気がする段階」を経て「できる段階」に至ると指摘している。学び方から技能に結びつける段階の工夫が、効果的な技能の習得に結びつき、跳び箱運動の楽しさを味わうことにつながると考える(図1)。

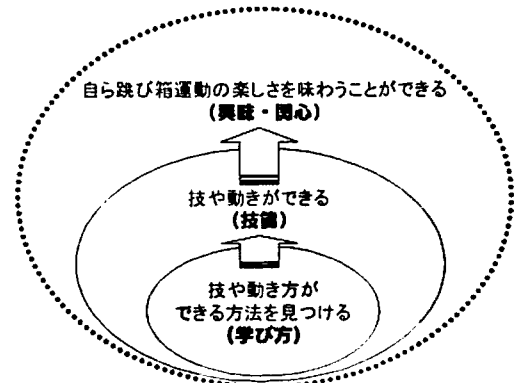


図1 跳び箱運動の楽しさを味わわせる工夫

本研究では、技や動きの習得に重きを置いた、学びや技能を身に付けさせる学習指導で跳び箱運動の楽しさを味わわせたい。そのために、系統性のある学習と基礎感覚づくり運動を工夫する。

2 系統性のある学習と基礎感覚づくり運動

(1) 系統性のある学習とは

成長するにしたがって、何気なく身に付いた動きと思われる、走る・投げる・捕るの動作には、その動きを獲得するまでのつながりがあり順序性がある。同様に、跳び箱運動の技や動きを習得するためには、技や動きの関連性、順序性から、そのつながりを明らかにしていく必要がある。そこで、跳び箱運動の様々な技や動きの中から、関連性のある技や動きをグループ化して整理する。更に、グループ化された技や動きを単純に並べるのではなく、基礎的な技や動きから身に付けさせたい技や動きへと順序立てた配置を行う。

授業では、児童一人一人が、課題に応じためあてをもって学習ができるように、グループ化された技や動きの中から、これから身に付けたい技や動きの関連性を理解させる。また、児童が設定しためあてと課題が関連したものであるかどうか簡単に確認できるめあて表を作成する(図2)。そして、児童・教師共にこのめあて表を常に確認して、やさしく覚えやすい技や動きから、難しい技や動きまで習得できるようになるための系統性のある学習を行う。

本研究では、このような系統性のある学習として、系統性のある学習資料と学習カー

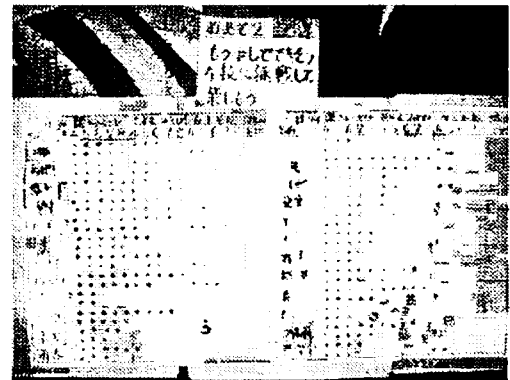


図2 跳び箱運動のめあて表

ドを活用させて学び方を習得させたい。また、系統性のある場をつくり、その場を活用させて技能を習得させたい。

(2) 系統性のある学習資料や学習カード

飛び箱運動の学習指導を行うとき、子どもが具体的な技や動きを覚えることで飛び箱運動の楽しさが分かり、それによって飛び箱運動の学び方も学習することができる。そこで、学び方を習得するために、飛び箱運動の仕組みや、基礎感覚づくり運動の種類と練習方法が示されている学習資料(資料1)を作成する。また、その学習資料をもとに、自己の課題解決のためのめあてが設定でき、段階的に練習ができるようにするための学習カード(資料2)も作成する。

体操のスキル-飛び箱運動編- 025000

かかえこみ跳びの「抜力」をきたえよう!

番 名前!

「かかえこみ跳び」に必要なスキル → ①高さ ②高さ ③バランス

ウツキ跳びを上手にしよう (ウツキ跳びのめあてポイント)

①空中に身体が浮くこと。
②手を離したときには、足は床に届いていないこと。
③手をつかなくなった時に、もう一度身体が空中に浮いていること。
④手が足よりも前に出て飛んでいること。

【練習のしかた】

- ・まよりを出さずウツキ跳び --- マットや体育科のラインを使ってみよう。
- ・跳び箱の上からウツキ跳び --- 跳び箱から安全マットにおりてみよう。
- ・マットよりウツキ跳び --- 足のうらでしっかり着地しよう。
- ・しょうがい物越しウツキ跳び --- 跳び箱や跳び箱を使ってみよう。

足をぶつけないようにしよう (足をぶつけないポイント)

①おしん、跳び箱が上がりながら、ウツキ跳びをする。
②手を離した時、おしん、おしん手をつかず。

【練習のしかた】

- ・トントン、トントンウツキ跳び --- 両足で、手を置いてやってみよう。
- ・ほじょうウツキ跳び --- 竹踏みや跳び箱をつけて、うでと足をおしてやってみよう。

資料1 系統性のある学習資料

体操のスキル-飛び箱運動編- 025000

飛び箱運動の「分かれ」をきたえよう!

(月 日 校時) 番 名前

★ 飛び箱運動の効果を、どんなめあてで、どんな工夫をしながらかかえこみ跳びの学習資料(資料1)から学び、自分なりに「かかえこみ跳び」をきたえていこう。

学習のめあて

①かかえこみ跳びの練習方法を自分なりに考える。②めあての達成。③めあての練習。④実際の反省。⑤自分なりに「かかえこみ跳び」をきたえてみよう。

①自分の今の力がわかる。②自分の目標を決める。③自分の目標を達成するために必要な練習方法を考える。④自分の目標を達成するために必要な練習方法を考える。

めあて1 → 今できる技・得意な技を選び、上手になって楽しもう。

名前	めあて	練習	結果

上手にできるようになる工夫を自分なりに考えて、くわしく書きましょう。
自分の結果も書きましょう。(O.Oで書いてください。)

めあて2 → もう少しできそうな練習に、挑戦して楽しもう。

名前	めあて	練習	結果

習得するようになるために必要な練習方法を自分なりに考えて、くわしく書きましょう。
自分の結果も書きましょう。(O.Oで書いてください。)

資料2 系統性のある学習カード

(3) 系統性のある場づくり

飛び箱運動は、開脚跳びやかかえこみ跳び等の切りかえし系と、台上前転や頭はね跳び等の回転系の二つのグループに分けることができる。それぞれのグループは、飛び箱運動の技や動きが「またぎ越す」と「回転する」という系統性があるため、学習過程においてグループごとの場づくりが必要であった。そのため、技や動きをスムーズに習得させるために、段階的に練習に取り組める系統性のある場を図3のように工夫して設定した。

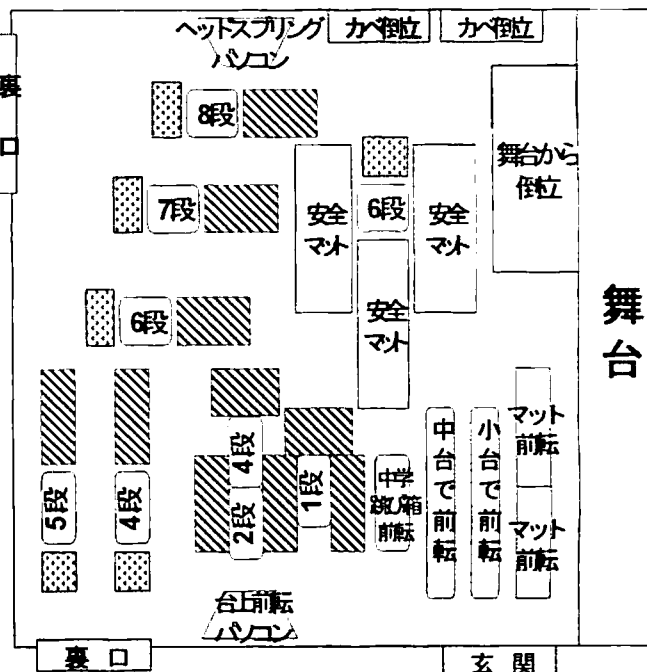


図3 系統性のある場の設定(回転系のグループ)

(4) 基礎感覚づくり運動の意義

跳び箱運動には、児童期に最も発達する基礎感覚の要素が多く含まれている。しかし、生活様式の変化に伴い、その感覚が、何気ない日常生活の中では獲得しにくくなっている。そのため、低学年の跳び箱遊びの授業から、転がったり逆さになったりする非日常的な運動が多くある跳び箱遊びを十分に経験させることが、基礎感覚を身に付けるためには重要である。

高学年での跳び箱運動の授業では、単元の初めから開脚跳びやかかえ込み跳び等、跳び箱を使った技や動きを習得するための学習が中心に行なわれてきた。しかし、跳び箱運動に必要な基礎感覚が身に付いていない児童も多いため、技や動きを習得させる指導が難しいこともあった。そのため、基礎感覚が十分に身に付いていない高学年の児童に対しては、一人一人のこれまでの体験に応じて、転がったり逆さになったりする基礎感覚づくり運動を跳び箱運動の授業に取り入れる必要がある。

(5) 基礎感覚づくり運動の工夫

跳び箱運動の技や動きを授業に取り入れるため表1のような基礎感覚づくり運動表を作成する。跳び箱運動の技や動きに関連した基礎感覚を五つ取り出し、その基礎感覚を身に付けさせるために必要な運動の種類をまとめる。更に、これらの運動が跳び箱運動のどの技や動きと関連があるのかを検討し、必修運動と必要運動に分けて表示する。

授業での活用方法は、毎時間の導入時に準備運動を兼ねながら基礎感覚づくり運動を行い、基礎感覚の素地づくりを行なう(図4)。基礎感覚が十分に身に付いていない児童に対しては、単元前時に運動時間を多く取り入れて基礎感覚を身に付けさせる。そして、単元が進み基礎感覚が身に付いてきたら、運動時間を少なくしめあて達成のための時間を多く設定する。また、ウサギ跳びや前転等、跳び箱運動の技や動きの形が似ている基礎感覚運動もあることから、切りかえし系と回転系のそれぞれに合った基礎感覚づくり運動を行う。

基礎感覚	運動の種類	切りかえし系		回転系	
		開脚跳び	かかえ込み跳び	台上回転	ヘッドスプリング
逆さ・開支持	カエルの逆立ち	○	○	○	○
	カエルの足打ち	○	○	○	○
	手押し車	○	○		
	ウサギ跳び	○	○	○	○
	馬跳び	○	○		
	カベ逆立ち			○	○
バランス	補助倒立			○	○
	片足バランス	○	○	○	○
	手足たたきジャンプ	○	○	○	○
	平椅子じゃんけん	○	○	○	○
高さ	ろく木からジャンプ	○	○		
	綱台からジャンプ	○	○	○	○
	旗びらからジャンプ	○	○	○	○
リズム	スキップ	○	○		
	わが・跳び	○	○	○	○
	片足相撲	○	○		
回転	裏グリグリ			○	○
	ゆりかご			○	○
	ブリッジ			○	○
	前転			○	○

表1 基礎感覚づくり運動表(◎→必修, ○→必要)



図4 ウサギ跳びと跳び箱からジャンプ

IV 授業実践

- 1 単元名 「跳び箱運動」
- 2 単元について

- (1) 一般的特性 (省略)
- (2) 子どもの立場から見た特性 (省略)
- (3) 児童の実態

跳び箱運動に関する意識調査から、跳び箱は楽しいと答えた児童は36人中、17人おり「技ができたとき嬉しいから」の理由が多かった。そして、好きではないと答えた児童は「練習してもできなかったとき楽しくない」と理由に挙げていた。また、跳び箱運動実態調査から (図5)

- ①技の習得に男女差がある。
- ②男子は開脚跳びはほとんどの子ができるが、閉脚跳び(かかえこみ跳び)・台上前転は、段が高くなっていくほどできる子が少なくなっている。
- ③女子は、開脚跳びの4段はできる子が多いが、5段・6段になっていくと、できる子が少なくなっている。
- ④閉脚跳びができる女子は1名で、台上前転は0人である。

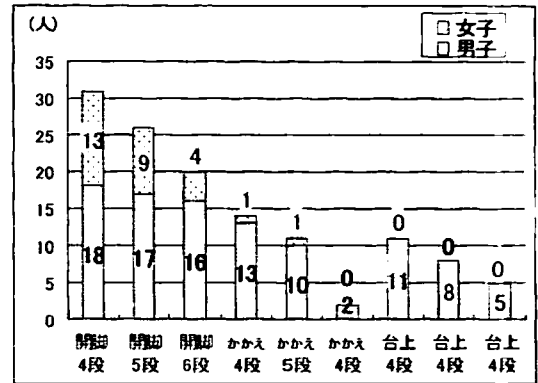


図5 跳び箱運動実態調査(36人実施)

これらの調査結果から、児童にとって、「できる」「できない」は跳び箱に対する意欲に大きく影響することが分かり、児童に身につけて欲しい技を習得させる工夫した授業を展開していくことを図っていきたい。

(4) 授業を進めるにあたって

跳び箱運動の技を身につけるために、跳び箱運動に必要な基礎感覚づくりを行っていききたい。逆さ腕支持感覚・バランス感覚・高さ感覚・リズム感覚・回転感覚の5つを身に付けることにより、跳び箱の技を習得しやすい体ができる。低学年の基本の運動領域ではあるが、ほとんどされていない児童の実態から取り入れることにした。跳び箱運動実態調査から、児童に習得させたい技は、開脚跳び・閉脚跳び・台上前転・ヘッドスプリングの4つに絞った。開脚跳び・閉脚跳び・台上前転は、習得してもらう技とし、子ども達の意欲を高めるために、発展技であるヘッドスプリングも習得させたい。学習を進めるにあたって、切り返し系のグループである開脚跳びや閉脚跳び、回転系のグループである台上前転やヘッドスプリングを分けて単元を進めていききたい。それにより、効率的な場の設定を行うことができることにより、より確実な技の習得ができると考えた。場の設定は、技の習得に必要な場を児童が分かりやすく選べるように配置の工夫を行っていききたい。児童がめあてに向かって学習に取り組んでいけるために、学習カードや学習資料の工夫を行っていききたい。安全に配慮した運動を行っていくことや、仲間同士での教え合いが活発になるために、跳び箱運動の特性を理解させ、補助の仕方や仲間への声かけの方法が身に付くようにしたい。

3 単元のねらいと単元の道すじ

(1) 単元のねらい

開脚跳び、閉脚跳び、台上前転、ヘッドスプリングの中から、できる技でいろいろな向きや高さの跳び箱を跳び越したり、できそうな技に挑戦して楽しむ。

(2) 単元の道すじ

めあて1

今できる技・得意な技を選び、上手になって楽しむ。

めあて2

もう少しでできそうな技に、挑戦して楽しむ。

4 時間配分 (8時間扱い)

	1	2	3	4	5	6	7	8
10	オリエン テー ション	基礎感覚づくり運動 (切り返し系)		基礎感覚づくり運動(回転系)			基礎感覚づくり運動	
20					台上前転 ヘッドスプリング			開脚・閉脚・台上 ヘッドスプリング
30		開脚跳び・閉脚跳び					めあて1	
40	基礎感覚づ くりの運動	めあて1		めあて1			めあて2	
		めあて2		めあて2			まとめ	

5 評価

(1) 器械運動の観点別評価規準

運動への関心・意欲・態度	運動についての思考・判断	運動の技能
器械運動の楽しさや喜びを求めて進んで取り組もうとする。また、互いに協力して運動をしたり、器械・器具の安全な使い方に注意して運動をしたりしようとする。	自分の力に合った課題の解決を目指して、練習の仕方を工夫している。	マット運動、鉄棒運動、跳び箱運動の特性に応じた技能を身に付けている。

(2) 跳び箱の学習活動における具体的な評価規準

観点	評価規準 (ねらい)	B基準	A基準	C基準 個への手だて	評価計画 (◎主に評価する時間)							
					第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時	第8時	
関心・意欲・態度	・できる技をもっと上手にしたり、もう少しでできそうな技に挑戦して楽しむ	・自分の力に合った課題に向かって取り組むことができる。	・自分の力に合った課題に向かって積極的に取り組むことができる。	・自分の力に合った課題に取り組むことができない。 ・自分の力を確認させ、それに合った課題に取り組むように声かけをする。		◎	◎	○	◎			
		・友達と協力して運動することができる。	・友達と教え合い励まし合いながら協力して運動することができる。	・友達と協力して運動することができない。 ・一人ひとりが協力することで、楽しい学習ができることを理解させる。	◎	◎						
		・準備や後片付けを行い、安全に運動することができる。	・積極的に準備や後片付けを行い、周辺にも気を付けながら安全に運動することができる。	・安全に運動することができない。 ・危険な行動や、起こりうる事故を改めて確認させる。	◎	◎				○		
思考・判断	・自分の力に合った課題の解決を目指して、練習の仕方を工夫することができる。	・自分のできばえや学習カードから課題を見つけることができる。	・自分のできばえや学習カードから自分の力に合った課題を見つけることができる。	・課題を見つけることができない。 ・今の自分の力を確認させ、学習カードを使って課題を助言していく。			○	◎	○			
		・友達の跳び方や学習資料等をもとに、工夫された場を選び、練習することができる。	・友達の跳び方や学習資料等をもとに技のポイントを見つけ、工夫された場で積極的に練習することができる。	・工夫された場で練習することができない。 ・学習資料をもとに、必要な練習を助言する。	○	◎	◎					
技能	・練習した技ができる。	・自分の力に合った技に取り組み、安定した動作で技ができる。	・自分の力に合った技に取り組み、安定した大きな動作で技ができる。	・安定した動作で技ができない。 ・安定した動作になるためのポイントを確認し、意識させる。		◎		○	◎	◎		

6 本時の学習 (8/8時)

(1) 本時のねらい

できる跳び方で、いろいろな向きや高さの跳び箱を跳び越したり、できそうな跳び方に挑戦したりして楽しむ。


(2) 本時の準備 跳び箱、踏み切り版、マット、ビデオ、学習資料、学習カード



(3) 本時の授業仮説

本時の学習で、次のような見通しを持って指導すれば、自ら跳び箱運動の楽しさを味わうことができるであろう。

- ① 系統性のある学習資料や学習カードを活用すれば、技や動きができる方法を見つけることができるだろう。
- ② 基礎感覚づくり運動や系統性のある場を活用すれば、今までできなかった技や動きができるようになるだろう。

(4) 本時の展開

	学習内容・活動	教師の支援	☆子への手だて ■仮説の検証
はじめ 10分	<p>1 跳び箱運動に入るための基礎感覚づくり運動をする。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>1 頭グリグリ (10回) 2 カエルの足打ち (1回) 3 ウサギ跳び (10回) 4 前転 (1回) 5 補助倒立 (10秒) 6 ブリッジ (10秒) 7 馬跳び (1回)</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽に合わせて楽しく基礎感覚づくり運動をさせる。 ・基礎感覚づくり運動が、技や動きの達成につながることを意識させ、一つ一つ正確にさせる。 ・良い動きをしている子どもを賞賛し、全体に広げる。 	<p>☆動きのポイントを確認させ、意識させる。</p>
なか 30分	<p>めあて1 今できる技・得意な技を選び、上手になって楽しもう。</p> <p>2 自分のめあてに取り組む。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>・開脚跳び ・かかえこみ跳び ・台上前転 ・ヘッドスプリング</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・踏み切り、着手、手の突き放し、着地ができるように工夫して、得意な技を、安定した大きな動作で跳ぶ。 ・友達と互いに見合って活動する。 ・友達が跳ぶときは、補助・アドバイスを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・場の確認や次の人への合図など、安全に注意を払うように助言する。 ・技のポイントを確認させながら、安定した大きな動作で跳ぶようにさせる。 ・友達同士で、技のでき具合を教え合うように助言する。 	<p>☆安定した動作になるためのポイントを確認させ意識させる。</p> <p>■系統性のある学習資料や学習カードを活用すれば、技や動きができる方法を見つけることができたか。 (行動観察・学習カード)</p> <p>■基礎感覚づくり運動を活用すれば、今までできなかった技や動きができるようになったか。 (行動観察・学習カード)</p>
	<p>めあて2 もう少しでできそうな技に、挑戦して楽しもう。</p> <p>3 自分のめあてに取り組む。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>・台上前転 ・ヘッドスプリング</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の力に合った技を練習するために、学習資料を参考にし、練習に適した場を選ぶ。 ・仲間同士で互いに教え合いながら学 	<ul style="list-style-type: none"> ・できる技との系統性を重視し、自分の力に合った技を選んでいくか確認する。 ・めあてに向かってがんばっている子や良い動きをしている子をほめ、周りにも広めるようにする。 	<p>☆学習資料をもとに必要な練習を助言する。</p> <p>☆安定した動作になるためのポイントを確認させ意識させる。</p> <p>■系統性のある学習資料や学習カードを活用すれば、技や動きができる方法を見つけること</p>

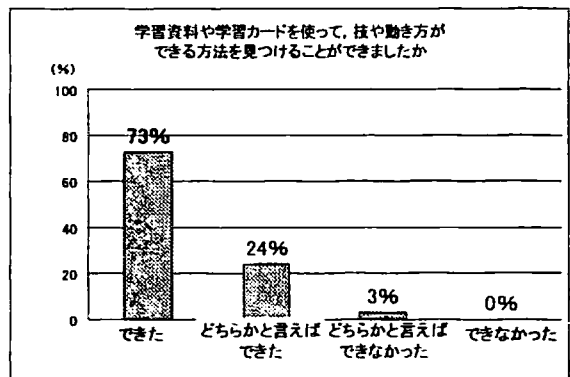
	<p>習を進める。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・仲間同士での見合い、教え合いを活用して、技の上達を図れるようにする。 ・できない子に対しては、動きのポイントをアドバイスする。 	<p>ができたか。 (行動観察・学習カード)</p> <p>■基礎感覚づくり運動や系統性のある場を活用すれば、今までできなかった技や動きができるようになったか。 (自己評価表・学習カード)</p>
<p>おわり 5 5 分</p>	<p>4 学習カードを記入する。</p> <p>5 成果を発表し合う。</p> <p>・学習カードにまとめたことを発表する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習を通して、楽しかったことや身に付いたことを振り返らせる。 	<p>■自ら跳び箱運動の楽しさを味わうことができたか。 (アンケート・学習カード)</p>

7 授業仮説の検証

授業仮説は、学習カードの自己評価(「できた(4点)~できなかった(1点)」の4件法)と、授業後の感想で検証した。

見通し1 系統性のある学習資料や学習カードを活用すれば、技や動きができる方法を見つけさせることができたか。

児童の「学び方」の自己評価(図6)から、97%の児童が「技や動きの方法を見つけることができた」「どちらかと言えばできた」と回答した。児童は、技の行い方の大切なポイントや、自分の課題について考え、自分のめあてをもつことができた。めあてを達成するために、系統性のある学習資料や学習カードを活用して、自分に適した基礎感覚づくり運動や、技や動き方ができる方法を見つけていた。



また、めあてに合っていない練習方法を設定している子や、練習方法を見つけることができない子へは、同じ課題を持つ友達との練習方法を参考にするように、声かけを行った。声かけによって、自分に合った練習方法を見つけさせることができた。よって児童は、系統性のある学習資料や学習カードを活用することで、技や動きができる方法を見つけることができた。

見通し2 基礎感覚づくり運動や系統性のある場を活用すれば、今までできなかった技や動きができるようになったか。

図7の児童の技能の自己評価から、「技や動きができた」(73%)「どちらかと言えばできた」(24%)と回答した。また授業の感想(資料3)から、系統性のある場を活用することで、技や動きができるようになった様子が伺える。また、場の設定をすることで、練習方法がやさしく・分かりやすくなったことや、また、自分の技や動きの習得具合により、練習の場を上手く活用していることが分かった。よって、技や動きができるようにするために、系統性のある場を活用させることは有効だった。

※授業仮説にある《基礎感覚づくり運動》については、研究の考察で述べる

以上のことから、系統性のある学習資料や学習カードの活用や基礎感覚づくり運動や系統性のある場を活用することは、自ら跳び箱運動の楽しさを味わわせることができたと言える。

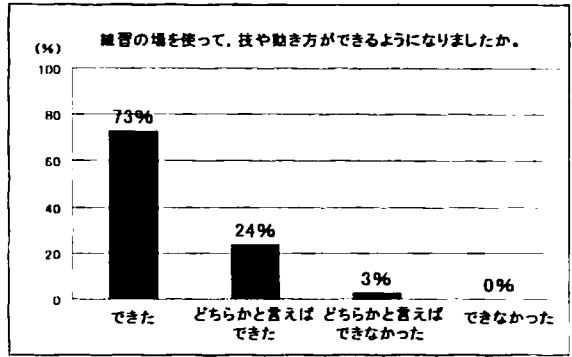


図7 技能の自己評価 (33人回答)

- 跳び箱の上を前転するのがとても怖くてできなかったけど、マットが乗せられていた台では上手にできたので、四段を少し怖がりながらやると、跳ぶことができた。
- ヘッドスプリングの前の練習のかべ倒立をやって、きれいにはできなかったけどコツをつかんだのでできるようになった。
- 台上前転ができないので、前転の練習をした。台上前転までは行けなかったけど前転が少し上手になったのでよかった。

資料3 場の活用に関する児童の感想

V 研究の考察

研究仮説の考察は、学習カードの自己評価（「できた(4点)～できなかった(1点)」の4件法)の第3時と第8時の比較、高橋健夫(1993)らが作成した学び方、技能、興味・関心についての指標「形成的授業評価」「形成的評価基準(五段階評価)」を活用した第3時と第8時の比較、更に児童の授業後の感想も取り入れながら検証する。なお、自己評価と形成的授業評価の検証はt検定で行う。

見通し1 系統性のある学習資料や学習カードを活用させることで、技や動きができる方法を見つけさせることができたか。

図8から、「系統性のある学習資料や学習カードの活用」の自己評価は、第3時よりも第8時で上昇が見られた($t(32)=-2.743, p<.01$)。図9の「学び方」についての形成的授業評価の比較でも、第8時は上昇し($t(32)=-3.268, p<.01$)、形成的評価基準では四段階から五段階へのアップが見られた。第8時では、33人中32人が「見つけた」「どちらかと言えば見つけた」と評価していた。更に、資料4の児童の感想からも、技や動きができるための方法を見つけることができたことが分かる。したがって、系統性のある学習資料や学習カードを活用させることは、技や動きができる方法を見つけさせることに有効であったと言える。

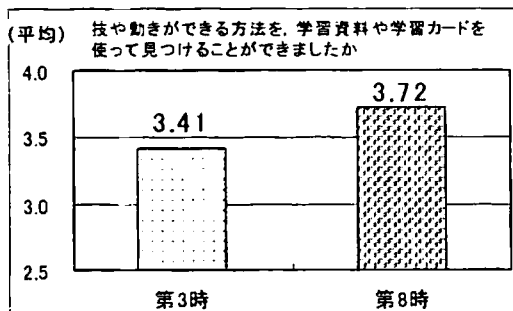


図8 学び方の自己評価の比較 (33人回答)

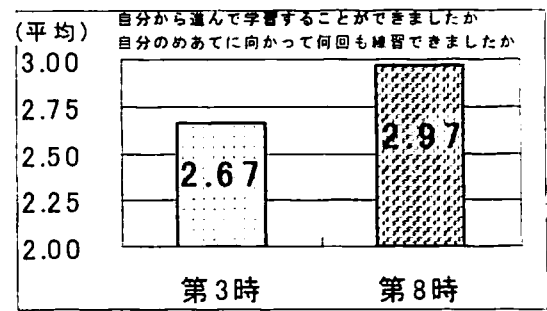


図9 学び方の形成的授業評価の比較 (33人回答)

- パソコンを使うと分かりやすいので、それを見て台上前転の着手のところが上手にできた。
- 自分のめあてを持って練習を一生懸命頑張ることができた。
- 跳び箱のことがあまり分かりなかったけど、徐々にやっていると、こうすれば跳べるのか

どうすればいいのかと考えることができ、跳び箱のことが分かり好きになった。
 ○着手の意味を分かったときに、僕はなんだか嬉しくなった。

資料4 学び方に関する児童の感想

見通し2 基礎感覚づくり運動や系統性のある場を活用させることで、今までできなかった技や動きができるようになったか。

図10から、「基礎感覚づくり運動や系統性のある場の活用」の自己評価は、第3時よりも第8時で上昇が見られた($t(32)=-2.743, p<.01$)。図11の「技能」の形成的授業評価の比較でも、第8時で上昇が見られ($t(32)=-4.370, p<.01$)、形成的評価基準では三段階から四段階へのアップが見られた。しかし、形成的評価基準を高い段階へアップさせるためにもさらに基礎感覚づくり運動や系統性のある場の工夫が必要である。また、児童の感想(資料5)からは、基礎感覚づくり運動や系統性のある場を活用することは、技や動きの習得に役立っていたことが分かる。したがって、基礎感覚づくり運動と系統性のある場の活用は、今までできなかった技や動きができるようになるために有効であったと言える。

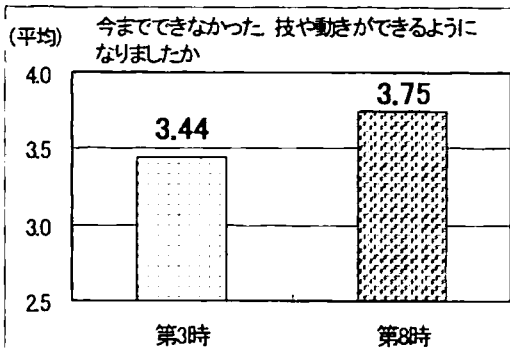


図10 技能の自己評価の比較 (33人回答)

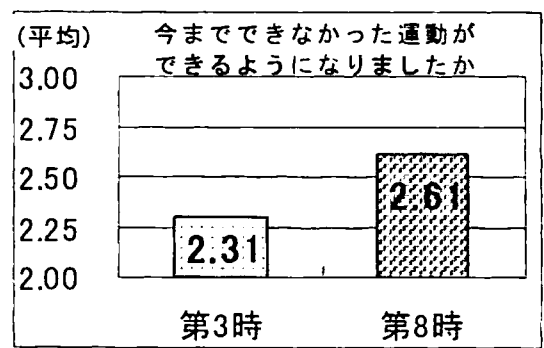


図11 技能の形成的授業評価の比較 (33人回答)

- 資料5 技能に関する児童の感想(○→基礎感覚づくり運動, ●→系統性のある場)
- ウサギ跳びを毎日練習したら四段の横のかかえこみ跳びができるようになって嬉しかった。
 - きそ力を練習した後に跳び箱を跳ぶと、きれいに跳べる時があった。
 - きそ力をほぼ毎日でやって、跳び箱がいっぱいできるようになってきた。
 - ヘッドスプリングまではできなかったけど、カベ倒立の練習をして、倒立ができるようになって倒立が得意になった。
 - 台上前転ができなかったけど、前転やマットがある跳び箱で練習してできるようになった
 - 前転からマットが乗っている跳び箱までを練習して、台上前転四段ができるようになって、とても嬉しかった。

結果 系統性のある学習や基礎感覚づくり運動を通して、自ら跳び箱運動の楽しさを味わうことができるようになったか

図12「興味・関心」の形成的授業評価の比較から、第3時よりも第8時で上昇傾向が見られ($t(32)=-1.979, p<.1$)、形成的評価基準では四段階の中で高い値を示していた。しかし、形成的評価基準を五段階へアップさせるためには、系統性のある学習や基礎感覚づくり運動のさらなる工夫が必要である。また、図12の第8時からほぼ全員の児童は跳び箱運動動

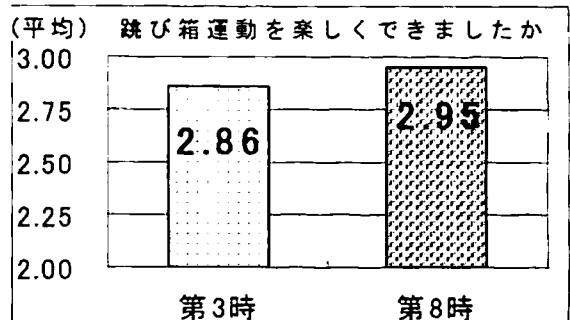


図12 興味・関心の形成的授業評価の比較(33人回答)

は楽しかったと評価していることが分かった。児童の感想(資料6)からも、学び方・技能の二つを習得することにより、自ら跳び箱運動の楽しさを味わうことができたことが分かる。したがって、学習指導の工夫として、系統性のある学習や基礎感覚づくり運動の活用は、自ら跳び箱運動の楽しさを味わわせることに有効であったと言える。

○私は前よりも、跳び箱が楽しいと思った。それは、いろいろな技ができるようになったり、跳び箱のことが少しずつ分かってきたから。

○今回の授業はとても楽しかった。一年生からの跳び箱の中でもとっても楽しかったので、もっとやりたいと思った。体育で、とても自分から運動することができたし、技ができるようになるために、いろいろな工夫をたくさんすることができた。

○跳び箱はあまり好きではなかったけど、やっていくうちに、跳べないようなものがだんだん跳べるようになってきて、好きになった。私は今、自信がついてきているので、体育がやりたい。六年生になっても、体育を頑張りたい。

資料6 楽しさに関する児童の感想

VI 研究の成果と今後の課題

本研究では、学習指導の工夫として、自ら跳び箱運動の楽しさを味わう児童を育てることを目指して行ってきたが、次のような成果と課題が出てきた。

1 研究の成果

- (1) 系統性のある学習資料や学習カードを活用させることで、児童は技や動きができる方法を見つけた(V-見通し1)。
- (2) 基礎感覚づくり運動や系統性のある場を活用させることで、児童は今までできなかった技や動きができた(V-見通し2)。
- (3) 基礎感覚づくり運動や系統性のある学習を通して、児童は自ら跳び箱運動の楽しさを味わった(V-結果)。

2 今後の課題

- (1) 跳び箱運動の技や動きを習得させるための、基礎感覚づくり運動や系統性のある場の工夫開発(V-見通し2)
- (2) 自ら跳び箱運動の楽しさを味わわせるための、基礎感覚づくり運動や系統性のある学習の工夫開発(V-結果)。

<主な参考文献>

高橋健夫	『体育の授業を創る』	大修館書店	1995年
金子明友	『教師のための運動学 運動指導の実践理論』	大修館書店	2001年
文部科学省	『小学校学習指導要領解説 体育編』		2003年